

二〇一三年六月二〇日 開催

「神田外語大学（KUIS）×東京外国語大学（TUS） 英語モジュール公開記念講演」

〈世界の英語〉へのご招待

——イギリス英語とアメリカ英語の違いを中心に

ジャック・デュラン

（執筆 〓 矢頭典枝）

■ 講演者……ジャック・デュラン（仏トゥールーズ大学教授）

■ 英語モジュール解説……川口裕司（東京外国語大学教授、言語文化学部長）、矢頭典枝（本学英米語学科准教授、グローバル・コミュニケーション研究所副所長）

■ 司会・通訳……矢頭典枝

本講演会は、本学が東京外国語大学と共同開発している無料インターネット教材「世界の英語モジュール」の本学独自ウェブサイトの公開を記念して開催された。講演者のデュラン先生は英語音韻論を専門とする立場から、世界中で話されている英語の多様性について、特に語彙、動詞の語形変化、発音の面などから解釈し、コーパスの重要性について、各国々

のネイティブスピーカーによる発音の違いを、録音された生の声を使って進められた。一言に英語と言っても、日本語にも方言があるように、国や社会階層、教育レベル、年齢、性別などの様々な要因によって、語彙、発音、文法のレベルにおいて実に多様な英語が存在する。今回は、世界の二大英語である「アメリカ英語」と「イギリス英語」を中心に解説がなされた。専門的な言語現象が分かりやすい事例で説明され、また通訳もあったため、言語学になじみのない来場者にとっても理解しやすい内容であった。

語彙 (The Lexicon or vocabulary)

同じものを表現する際に、イギリス英語とアメリカ英語では異なる単語を用いる場合がある。例えば、表1に示されるように、「ズボン」はアメリカ英語では pants と言うが、イギ



川口先生



デュラン先生



矢頭先生

リス英語では trousers と「ズボン」、pants は「下着」という意味になる。

形態論 (Morphology)

動詞の過去形と過去分詞の変化形が、イギリス英語とアメリカ英語では異なる場合がある。

表2にあるように、learn の過去形はアメリカ英語では learned、イギリス英語では learnt—これはアメリカ英語の方が規則的な変化をする例である。他方で、表3に示されるように、その逆もある。例えば、dive の過去形と過去分詞はイギリス英語では規則的に両者とも dived となるが、アメリカ

【表 1】アメリカ英語とイギリス英語の語彙の違い

	アメリカ英語	イギリス英語
エレベーター	elevator	lift
(建物の) 二階	second floor	first floor
私立学校	private school	public school
ズボン	pants	trousers
下着 (下の)	underpants	pants
高速道路	freeway (LA), parkway (NJ)	motorway, expressway
蛇口	faucet, spigot	tap
ブラインド	shades	blinds

【表 2】アメリカ英語とイギリス英語の動詞の変化形 (イギリス英語が非規則的な例)

原形	過去形・過去分詞	
	イギリス英語 (=非規則的)	アメリカ英語 (=規則的)
burn	burnt	burned
dwell	dwelt	dwelled
learn	learnt	learned
smell	smelt	smelled
spill	spilt	spilled
spoil	spoilt	spoiled

【表 3】アメリカ英語とイギリス英語の動詞の変化形 (アメリカ英語が非規則的な例)

原形	イギリス英語 (=規則的)	アメリカ英語 (=非規則的)	
	過去形・過去分詞	過去形	過去分詞
dive	dived	dove	dived
fit	fitted	fit	fitted
sneak	sneaked	snuck	snuck
get	got	got	gotten

英語では、その過去形が *dove* になることがよくある。

音韻論 (Phonology (音の体系))

音韻面、つまり発音の面でもアメリカ英語とイギリス英語は違いがある。

たとえば、*caught* という語の長母音は、アメリカ英語では「アー」に近く、イギリス英語では口を丸めて「オー」に近い音で発音される。また、オーストラリア英語では、「エイ」が「アイ」に近い音で発音され、*today* が「トゥダイ」のように聞こえる。

また、「r」の音を発音するか、しないかの違いも大きな特徴として挙げられる。すべての英語変種に共通するのは、「r」のスペルが語頭、あるいは語中にあり、かつその後に母音が続く場合、「r」は発音される点である(たとえば、*rat* や *bartering*)。しかし、「r」のスペルが母音の後にあり、その後に母音が続かない場合(たとえば、*car* や *cart*)、「r」を発音する英語変種と発音しない英語変種がある。専門的には前者のような発音を *rhotic* (ロウティック)、後者を *non-rhotic* (ノン・ロウティック) と表現し、アメリカの標準英語は *rhotic*、イギリスの標準英語 (容認発音 *received pronunciation*) やオーストラリア英語は *non-rhotic* に分類される。

コーパス (CORPUS) の重要性

コーパスとは、言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報と付与し、コンピュータで検索可能にしたものであり、言語学の様々な研究や言語教育、言語政策、辞書編纂などの目的に



「アメリカ英語」の動画 #1: 「挨拶する」

活用されている。コーパスの構築により、世界各地の英語発音のバリエーションの存在が明確となり、かつ体系化に役立っている。(さらに、アメリカ英語、イギリス英語、スコットランド英語の発音の違いについて、来場者たちは、単語の読み上げと自然会話の録音を聴きながら楽しく学んだ。)

〈解説〉「神田外語大学×東京外国語大学英語モジュール」

デュラン先生の講演後、本学が東京外国語大学と共同開発している無料インターネット教材「世界の英語モジュール」についての説明とデモンストレーションがあった。まず川口先生が、東京外国語大学が開発してきた二二言語の「TUF S言語モジュール」の概要と機能について説明を行い、続いて、矢頭先生が「世界の英語モジュール」が開発されるようになった経緯とその特徴について解説した。主要なポイントは次の通りである。

「英語モジュールの開発へ 世界の英語 (World Englishes) の視点から」

現在、日本の中学校・高等学校における英語教育では、アメリカの標準的英語が規範となっている。しかし、グローバル化が進むこの時代、日本人の英語を学ぶ環境は、多様な英語に接する環境へと変化し、例えば、学生たちの留学先もア

メリカ、英国、オーストラリアなど多様化し、英語を母語とする国であっても、国によって語彙、発音、文法などの違いが存在することが認知されている。さらに、英語を共通語とするビジネスの場でも、アジアやアフリカ諸国において、それぞれ独自の英語に接する機会は増えており、教育の現場では、多様な国々から英語教師がやってきて英語を教えている。そのような様々な場面において、中・高で学習した英語と異なる英語に接し、とまどう日本人学習者が多いのが現状である。日本人にとってアメリカ英語以外の英語は馴染みがなく、また、ある国の人には通じた単語が別の人にはなかなか通じないということも起こる。ある程度、多様な地域や国で実際に使われている英語の差を知っていれば互いに理解しあえる、また、一つの英語が他の英語よりも優れているわけではない、というメッセージを私たちは日本人英語学習者たちに伝えたのである。

そうした中、英語研究の分野では、世界の英語圏の様々な英語を“World Englishes”と複数形で捉え、それらの違いに関する研究が英語教育に応用されている。このような学術的傾向を踏まえ、東京外国語大学が長年開発してきた二二言語のインターネット教材「TUF S言語モジュール」で培われた技術と、約七〇名の英語ネイティブ教員を抱える神田外語大学の English Language Institute (ELI) の人的資源とを融

【表 4】各言語共通の 40 の言語機能

1. 挨拶する	11. 程度についてたずねる	21. 順序について述べる	31. しなければならないと言う
2. 感謝する	12. 時間についてたずねる	22. 状況についてたずねる	32. 禁止する
3. 注意を引く	13. 数字についてたずねる	23. 条件をつける	33. 指示する
4. 自己紹介する	14. 手段についてたずねる	24. 比べる	34. しなくてくれと言う
5. 謝る	15. 能力についてたずねる	25. 提案する	35. しなくてもよいと言う
6. 人にものをあげる	16. 場所についてたずねる	26. 理由を述べる	36. 招待する
7. さよならを言う	17. 特徴についてたずねる	27. 依頼する	37. 助言する
8. 金額についてたずねる	18. 意見を述べる	28. 例をあげる	38. 要求する
9. 経験についてたずねる	19. 好きなものについて述べる	29. 妥協する	39. 希望を述べる
10. 予定を述べる	20. 好きな行動について述べる	30. 許可を求める	40. 人を紹介する

合して、「世界の英語“World Englishes”——社会言語学的変質研究に基づいた英語モジュール——」が開発された。

今回公開された「世界の英語」モジュールは、世界の三大英語である「アメリカ英語」「オーストラリア英語」「イギリス英語」の三種類のコンテンツで構成されている。各英語（コンテンツ）には、共通して四〇の言語機能（表 4）の会話を掲載しているが、この言語機能については東京外国語大学が一九九五年から直近まで市販している、ネットや CD で学ぶことができる多くの教材を八言語について調べ、共通する項目に絞り込んで選択されたものを活用している。

全四〇会話のうち、二〇会話は、各国の文化や状況を反映させ、その英語固有の語彙や語法を多く含む会話を集めたスクリプトで構成されている。あとの二〇会話は、部分的に語彙や表現をその国のものに変え、その国固有の発音で会話がなされるものの、基本的には同じスクリプトで構成されている。

今回公開された本学のモジュールでは、まず国別のコンテンツを選択し、次に前述の四〇言語機能からひとつを選択すると、ひとつの画面に、テキスト部分（日本語訳と英語）とムービー部分が表示される。登場人物 A と B ふたりの会話は、片方だけでも両方のテキスト部分、そして音声を消すこともできるため、声を出して学習するのにも便利にできてい



「イギリス英語」の動画 #5: 「手段について尋ねる」



「オーストラリア英語」の動画 #16: 「禁止する」

る。さらに、テキスト毎についているノートアイコンにマウスのポインターを重ねると、単語の意味と発音の特徴についての説明が表示される。これも、各国の特徴的発音が高校生や一般のビューアーにもわかりやすいように、一部カタカナ表記を用い、他方で、大学の授業でも使えるように国際音声記号や専門用語(「有声」「長母音」「声門閉鎖音」など)も表記されている。

特有の語彙として、オーストラリア英語を例にあげると、「Ta」「What a hoon!」「Good on ya.」「barbie」「arvo」「hard yakka」「Maccas」などの単語は、耳慣れないばかりか、一般の辞書をひいても、意味がみつからない場合も多い。因みに、それぞれ「Ta.」がありがとう、「What a hoon!」なんて奴だ!」「Good on ya.」よくやった、「barbie」バーベキュー、「arvo」午後、「hard yakka」むずかごと、「Maccas」マクドナル

ド(固有名詞)」という意味を持つ。これらのコンテンツ作成には、神田外国語大学に在籍する約七〇名の英語ネイティブ教員 (English Language Institute: ELI) という人的資源が大きく貢献している。スク립トの作成と動画出演は、まさにELIの専任教員が担当している。動画撮影も、同大学のスタジオ施設で行われ、編集とウェブ化作業は東京外国語大学が担当し、両大学三名ずつの研究者によって開発された。

「世界の英語」モジュールの特徴は簡潔に次のようにまとめることができる。

1. 日本人が接するようになった多様な英語変種の〈違い〉を学ぶことができるインターネット教材
2. 「モバイル版」があるため、通勤・通学時の学習にも便利
3. 英語音声学、英語音韻論、英語学、社会言語学、方言学を専門とする研究者による研究に基づいた学術的教材
4. 大学の教材としても活用でき、かつ一般のビューアーにも理解できるように開発
5. 公費(日本学術振興会科学研究費)による大規模な無料のインターネット教材

会場には、収容人数を上回る約一四〇名が来場し、熱心に話を聞いていた。聴衆のなかには英語モジュールの動画に出演したELIの教員たち、そして、動画撮影を担当した職員た

ちの姿もあり、ついに公開されたへわたしたちの英語モジュールのデモンストレーションの様子を見守ってくれていた。



会場風景